

露の世ながら さりながら

この二年間、コロナ感染者数
や亡くなられた数に、一喜一憂
してきた毎日です。第六波が来
るとも言われたり、三回目のワ
クチン接種が必要だとも言われ
ています。

そんな中、私は、小林一茶の
『おらが春』にある一句が、頭
をよぎります。一茶は、五十六
歳のときに、長女が生まれ、た
いへん可愛がりましたが、翌年、
亡くなっています。次の句は、そ
の悲しみの中で詠んだ哀悼の句
です。

露の世は 露の世ながら

さりながら

『一茶歳時記』は、この句を、
『露の世』すなわち、露のように
はかない現世は、まさに露のご
とき世であつて、そのほかではな
い。そういうことは、頭の中
は十分に承知している。そうで
はあるが、『思ひ切りがたきは
恩愛のきづな也けり』と、悲痛
な心のうちを吐露したのであ
る」と説明し、さらに、一茶が肉
親や郷里の近親者の死に出会う
たびに耳にしていた蓮如上人の

御文章(白骨の章)を引用し、

『さりながら』は、その御文章の
趣意を領解(仏の教えを聞いて
悟ること)の上のことだった」と
解説しています。

《仏教名言辞典》は、「この世は
露のようにはかない。はかないけ
れど、それなりにせいぜい大切
に生きるほかないようだ」といい、
《仏教ことわざ辞典》は、「この
世は露のようにはかない世界で
あるが、しかし、かけがいのない
世界である。ほうり出すことも
できなければ、逃げ出すことも
できない。それだったならば、大
切に生きるよりほかないのであ
る」と解説しています。この世は
露のように儂いもの。いつ何が
起きるか分かりません。それは

充分承知の上ですが、それでも

やはり……と書いて筆を置いて
います。そこに一茶の心の中
はどうにも諦めきれないとい
う悲痛な叫びを感じるのです。

このコロナ禍の中で、感染した
人のみならず、すべての人が、い
たたまれないしんどさを感じて
おられることでしょう。一茶も
同じ気持ちだったと思います。
私たちは今、コロナに翻弄され
ていますが、この苦しみの現実を
ありのままに受け入れることも
必要なのです。
何を信じていいかわからなく
なるような世の中です。「さり
ながら……」と思ひながらも、
自分の人生です。大切に生きて
行くようではありませんか。